
二つの太陽

みずも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二つの太陽

【Nコード】

N6639A

【作者名】

みずも

【あらすじ】

それは遙か昔の古代ローマ時代…。戦火の絶えない激動の渦の中で勇気が持てない臆病な少年と、皇帝に寵愛された人の心を捨てた少年が出会った。そしていつしかこの国は彼らの小さな手によって静かに操られていくのだった…。

プロローグ（前書き）

初めて書いた小説が本作品です。歴史観や設定がデタラメなところが多々あるかと……。深く考えず、読み流して頂けたらありがたいです。

プロローグ

知っているよ、みんなが陰でコソコソと私をゆび指し、声を揃えて“悪魔”と罵るのさ。

けっこうだ。“人”であることをとくに捨ててしまった私を天使か悪魔というならば迷うことあるうか…
みんなは私を“悪魔”と呼んだらいい。

透きとおる真っ青の空が、

白くてつぶらなアーモンド花が、

夕日に紅く染められたフォロの町並みが、

涙が込み上げてくるほど美しいんだと知ってしまった

君が教えてくれた

けっこうだ。“人”であることをとくに捨ててしまった私を天使か悪魔というならば迷うことあるうか…
みんなは私を“悪魔”と呼んだらいい。

だが君の前では“人”として生きていたい。

プロローグ（後書き）

いよいよ次回から本作品スタートです。つたない文書に、梅雨の様にじめじめして、暗くて、やたらと長い…。気長にお付き合い頂ける方、よろしく願います。また厳しいご意見・ご感想もお待ちしております。

第1章 フォロ・ロマーノへ

今日の空は黒くて重い。やけに息苦しく感じてしまうのは、この天候のせいだろうか？それとも僕が握り締めているこの手紙のせいだろうか？

「クーリア（元老院）まではどれ位かかりそうだい？」

今にも見上げた空からは、大粒の雨がこぼれ落ちてきそうで、不安げな瞳をした栗色の髪の少年が、隣で馬車を走らせる使用人の男に問いかけた。

「そうですね、フォロ・ロマーノに入るまで小一時間って、ところでしょうか。カル口様」

額にうつすら汗を浮かばせた使用人は、間髪いれずに馬に鞭を入れている。さらに速度を上げて、ローマの中心地に向かって馬車はがらりと突き進んで行く。

「あれ：なんでしょうかね。前方に見える大きな建物は。カル口様はご存知で？」

使用人は林の切れ目から急に現れた前方の楕円の巨大な建物を指指した。男は息が弾み、日焼けで浅黒くなっている頬を紅潮させた。

年甲斐もなく非常に興奮している様子だ。

「ああ、あれは最近出来上がったばかりのコロッセオという闘技場だよ。中ではライオンや虎など野獣同士を戦わせているって聞いたよ。それに剣闘士同士が戦いあっているとも聞いた」

「へえー。さすがカルロ様は物知りですな」

使用人の男は大した教育を受けたこともなく、まだ13歳という若さながらこの様に、博識で教養のあるカルロに感嘆した。またカルロは少々幼さは残るが、ローマの街でも一、二位を争う美女として有名だった、亡き母親譲りの丹精な顔つきをしていた。

「コロッセオでしたかね、機会があればその剣闘士同士の熱い戦いを、自分も見てみたいもんですな」

目を輝かせて語る使用人は、まさにこのご時勢の“野蛮なローマ人”そのままだとカルロは思い、その象徴になるであろうコロッセオに、血生臭さを感じられずにはいられなかった。

「戦い合いじゃない…殺し合いの間違いだよ」

ぼつりと呟いたこの言葉は、誰に聞こえる訳でもなく、激しく回転する車輪の音に掻き消されていった。

馬のいななきと共に、車輪がゆっくりと地面を滑りながら、そして最後に馬車は止まった。

周りには石造りの神殿や建物がそびえ立っている。また色鮮やかな装飾が端々に施された織物や、ローマで人気のあるカンパニア地方やラティウム地方のワインなどが、街中のあちらこちらで所狭しと売られていた。

ここフォロ・ローマーノは昔4つの丘の間にあった湿地帯であり墓場として使われていた。今ではローマの中心地として、商業が栄え、政治の統率を図る重要な公的機関も備えている大都市に成長した。

「よかったですな、雨が降り出す前にどうにか着きましたよ。フォロ・ローマーノに」

使用人は未だ振り出す気配のない空を見上げ、安堵の表情を浮かべた。

「天が味方してくれたかな。これなら雨水に濡れずにクーリアに着けそうだよ。ここからは僕ひとりで歩いて行くから、お前は邪魔にならない場所に馬車を止めて…そうだな市場で見物でもして待っててくれないかい」

忘れ物はないか、カルロは荷台を確認し馬車から降りた。後を追う様に金の刺繍がなされた外衣も一緒に宙をふわりと舞った。

「お気を付けて。カルロ様はただ歩いているだけでも、その…みんなの目に止まりますから」

「はは、そうだね。こんな大そうな外衣を羽織ってたら、賊らのかっこうの獲物かな。でも父上の命令だから仕方ないんだよ。訪問する場所が場所だけにね。」

カルロは苦笑い交じりに使用人にこう答えた。

「そんな意味ではありませんよ。この人々は、何ていうか。その…淫奔な輩が多いですから。くれぐれも暗い道だけは避けて下さい」そして再び使用人は、手綱を引き馬車を停めにカルロの前から去って行った。

行きかうローマの人々はみな陽気だ。街を歩くと、どこかのお社からは笛の音が風にのって流れてくる。元来、人混みが苦手なカル口はこの都会の喧騒とも言える、熱にあてられ人に酔ってしまった。カル口は脇道にそれ、ひと目を避けて目的の三角屋根の建物に足早に向かった。

（はあ…なんで父上は僕に使いを頼まれたのだろうか。それも寄りによってクーリアに行けなんて。あそこには眉間に深いシワを寄せた、怖い顔したおじさんばかりが踏ん返り返って、僕らみたいな弱輩者をしげしげと睨みつける。数分も持ちやしないよ…）

気は滅入るばかりであったが、猛将と謳われた父の命令は絶対だった。カル口の父親は解放奴隷であり、一代で財を生じた。父は質のよい蜜蜂を輸入し、その巢からとったプロポリスで民間薬を作り、ローマの民に重宝された。これをきっかけに広大な土地を手に入れ農作を成功させ、軍人になり、軍の司令官として数多くの勝利をもたらしてきた。その栄誉として元老院議員に選ばれたのだった。

そしてこの元老院議員が集まり、ローマの最高機関元老院会議が開かれる場所こそが、僕が向かっているクーリア（元老院）なのであった。

しばらく歩くと建物と建物の上に三角屋根が見え始め、だんだんその姿が大きくなっていく。

（さっさと用事を済ませて帰ろう。ただ手紙を渡すだけなんだし、第一あのおじさん達と共通の話題って…ある訳ないだろうし）

カル口は嫌いだったのだ、このクーリアが。

腹の内を見せない、元老院議員達が集まって話し合ってるようなこ

の場所は、まさに“伏魔殿”のようだった。

さらにひと昔まえには、名将と呼ばれた人物がこの建物も前で殺害された血塗られた場所でもあった。

「はあ……」

気がつけば何回目のため息だろう。カル口はこんな臆病な自分にだんだん嫌気がさしてきた

その瞬間だった。

「……」

強い衝撃が稲妻の様に、カル口の後頭部に走った。

そして強引な力で瞬く間に、一気に暗い闇の中にカル口を引っ張り込んでいったのだった。

第1章 フォロ・ロマーノへ（後書き）

こんなに長い話しにお付き合い頂きまして、感謝でいっぱいです。
この話を書いてしていると自分の脳みその少なさを実感してしまい
嘆き悲しむばかりです。精進しなければ！

第2章 路地裏の悲劇

「うう……」

カル口は苦痛に顔を歪め、うめき声をあげた。

「何をする……！」

ありったけの声を絞り抵抗しようとした。その時だった、カル口の喉元に鈍く光る鋭利な刃物があてられた。瞬時にそれが何かと理解し、吐き出しそうになっていたその声を、そのまま飲み込んでしまった。

（追い剥ぎか！？それとも……）

後頭部を殴られ、意識朦朧とする中、ふと先ほどの使用人の言葉がはつきりと頭の中にこだましてきた。

『ここの人々は、何ていうか。その……淫奔な輩が多いですから。くれぐれも暗い道だけは避けて下さい』

（そんな馬鹿な……白昼どうどうとしたこの時間に襲われるなんて）

恐怖とおぞましさが一気に込み上げて、強い吐き気と共に、一筋の涙がカル口の目からこぼれて落ちた。

（嫌だ……嫌だよ、誰か助けてくれ……！）

(……………あれ!?)

次の瞬間、急に羽が生えたのように、体が不思議なことに軽くなった。そしてカルロを強く締め付けていた腕が、ずりりと胸元から滑り落ちていった。同時に地面に転がる短剣に、カルロは思わず息を呑み込んだ。

「どさっ」

カルロの後ろで人が倒れる音がした。

振り向きたくない…。全身を駆け巡る恐怖心。だが全く事態を把握できてない今は見ない訳にはいかない。振り向いたら全てが終わってしまうかもしれない。二つの究極とも言える選択肢に葛藤、自問し、カルロは腹を括った。

「えっ!?’

まなこがまん丸になるって言うのがどういうものなのか、カルロ自身、生まれて初めてこういうことなのだと知った。

「君が助けてくれたの?’

カルロが振り返り見上げた先には、同年もしくは若干、年上であろう位の少女が立っていた。彼女の肌は透けるような白さで、肩にふんわりかかる金系の様な髪、それにふたつの淡い碧い瞳でカルロを見つめた。思わず見入ってしまうほど美しい子であった。

その彼女の両手には、地面にひっくり返っている通り魔を殴ったと

思われる、おとなの握りこぶし程の石塊がしつかり握られていた。

「あの…ありがとう。その…女の子に助けてもらうなんて」
言った瞬間、気恥ずかしくなり、口ごもってしまった。

（間違っても父上には言えない…大の男が襲われそうになったところを、女子に助けてもらったなんて。男尊女卑の考えを持つあの人が聞いたら怒り狂うだろうな）

カルロが考えを巡らせていたその時だった、何かものが動く気配がした。

「くそ……ガキ共が…」

カルロは青ざめた。足元に倒れている通り魔が、目を覚ましてしまったのだ。いや、完全に卒倒していなかったと言うほうが正しかったのだろ。この男は白い上質の絹衣をまとっており、追剥たぐいの賊の輩ではないとすぐに判断できた。

浮気などは当たり前、快楽を求めてうろつく淫売婦、“稚児”という少年奴隷を連れ歩く主人…。

一部の市民の中ではこういった男女の性という観念が滅茶苦茶だった。

この世情は征服した領土に属州（辺境に置いた直轄地）を設置し、勢力化していく帝国ローマ時代の裏側とも言える悪の姿だった。

身の毛のよだつ思いでカルロは急いで立ち上がるうと、2本の足に力を入れた。が、腰が抜けて、うまく立ち上がれずにいた。両の足は先ほどの恐怖で、ただの棒切れに化していたのだ。

（どこまでも情けないんだ僕は、もうすぐ15になり成人式を迎えるってのに…）

再び奮起して立ち上がるうとしたその時、長くほっそりとした指先が、カルロの前に差し出された。

金髪の少女の手であつた。

しかし見下ろす彼女の視線は“救いの手”とは程遠く、冷気を運び、カルロは素直にその手につかまること事ができなかった。
いや、そう感じたのは、ぬるま湯の中でなに不自由なく、また穢れなく育ってきたカルロにとっては、もしかしたら初めて味わった屈辱だったかもしれない。

だが事態は深刻であつた。

「…っち」

頑なに拒否するカルロの態度に業を煮やし彼女は舌打ちした。そして伸ばした手でそのままカルロを引っ張り上げた。

「わぁ…!!」

予想だになかった、彼女の腕力と気性の激しさにカルロは思わず、上ずった声を出してしまった。

「ち、ちよつと待ってくれ！足がもつれてしまつて…」

慌てふためくカルロに、彼女は一喝するように睨みつけこう放った。

「私には時間がないんだ、もたついてないで早くここから立ち去るよ」

カルロは驚愕した。

その少女の声は自分が想像していた様な、細くて柔らかいソプラノの響きとは違う

紛れもない澄み切った少年の声をしていたからであった。

第3章 笑う悪魔

「私には時間がないんだ、もたついてないで早くここから立ち去るよ」

カルロの前で揺れる金糸の髪から漂う香りは“ローズかな？”緊張感のないゆるい香油の香りが、ふわりとカルロの元に踊り立った。

(…甘い…香り)

なぜか不思議と落ち着くその香り。

カルロは少年から手を引かれ進むが、宙を駆けるような感触で地面をしつかりと蹴れずなんともおぼつかない足取りだった。

だが前に行く少年は違った。カルロの手を力強く引き、またその後ろ姿はとても勇ましく逞しく、彼らはそのまま路地裏を後にした。

「はあ…はあ…」

狭い路地裏から一気に駆け出したカルロの心臓は、今にもはち切れそうな水がたんまり入った皮袋のように、膨れ上がり大きな鼓動

を打っていた。

「よかった…助かった…」

路地裏から飛び出し、急に開けた視界は、曇り空にも関わらずやけに眩しく見えた。そして普段と変わらぬローマの町並みに、ほっと胸を撫で下ろしたカルロはようやく己の平静さを取り戻した。

しかしそれと相反して息急き切って駆けてた少年は、上半身うな垂れて大きく肩で息をしていた。

よっぽど疲れたのだろう…また緊張もあったのだろう。カルロは申し訳なさを感じながらも、少年にかける言葉を必死で探すか、お座なりのセリフしか浮かんでこなかった。

「君は大丈夫？その、僕を助けようとして怪我なんてしなかったかい？」

だがその問いに返ってくる言葉は無かった。

「…まさか怪我でもしたの!？」
むなしく通りに響くカルロの声。

「…ご、ごめん」

カルロは謝って許してもらえなくてもないが、巻き込んでしまった罪悪感で居たたまれぬ気持ちになった。意を決してもう一度口を開きかけてたその時だった。

「ぶっ」

「!？」

急に噴出した少年はいよいよ我慢が出来なくなったのか、次にはケタケタと笑い声を上げ始めた。

そして事態が全く飲み込めていないカルロだけがその場に取り残されて、少年が落ち着くまで呆然と見守るしかなかった。

ようやく満足し笑い収まったのか、少年は目尻に溜まった涙を拭きながら上目遣いでカルロを見てきた。

「くく…運がよかったよ、あんた。奇跡だ」

「奇跡？あの…僕は君が何を言ってるのか意味が分からないし、何がそんなにもしろいのか見当もつかないんだけど…」

何かの弾みで少年の何処かのネジが落つこちてしまい、壊れてしまったのではないかとありもしない錯覚に惑わされて、カルロの灰色の瞳がざわついた。すると目前で嘲笑いを浮かべていた少年が急に険しい顔付きに変わった。

「いけない、私には時間がなかったんだ。もうここまで逃げて来ればあの色魔も追っては来ない。生まれたての子羊と同じくらい頼りない、そのあんたの足でも逃げとおせるよ」

「…なっ!!」

皮肉を込めた洗礼を浴びせられたカルロは一気に頭に血が昇り、頬を紅潮させて自分でも珍しく人に食ってかかった。

「今のは聞き捨てならない！それに僕の質問は終わってないよ、最後まで質問には答えるよ！」

だが少年はくりりと背中を向け、答えるそぶりも見せず立ち去ろうと2、3歩進んだところで、ぴたっと立ち止まった。そしてそのままぼつりと呟いた。

「悪魔の気まぐれ…か」

「悪魔…？」

的の得ない少年の口から零れた言葉が不気味で、慄くカルロの中で警鈴の音が鳴り響いた。

この子は危険だと。

背格好からしておそらく同じ年齢だろう。見た目はそう思ったが腑に落ちない。なぜならあれは少年の目と呼べるの代物ではなかった。

「私の魂の端っこには、もう捨てて無くなってしまったと思い込んでたほんの僅かな…人の心が残っていたのか」

少年はうつむき、すれ違う人々とは決して目を合わせることなく三叉路を曲がり見る間にその姿を消した。カルロの元に残されたのは悪魔の呪言のみ…。

恐ろしさや怒りで高揚するカルロだったが、彼の淡い碧い瞳はなぜかとても人間ばなれし、天使でなければやはり悪魔という安易な考えに結び付いてしまう。納得いく答えが見つからないまま、気が付けば見上げた空からポツポツと雨粒が降り始めたのだった。

天使の皮を被った悪魔…か

第3章 笑う悪魔（後書き）

なるべく定期的に更新はしていくつもりですが、気力・体力？共に衰えが目立つ昨今です。また辛口な感想で結構ですので一言残して
いって下されば励みになります

第4章 手紙1

『 親愛なる バルトロヘ 』

第6ウイクトリクス軍団の、ゲルマニアでの活躍、我がことのよ
うに感じら大変うれしく、また誇りに思う。

だが私と言ったら、今や軍を指揮することもなく横臥し、事の成り
行きを見守るだけの傍観者に成り下がってしまった。

まことに情けないことだ。そんな私の戯れにしばし耳を傾けて頂け
たら幸いだ。

今、私はあるストア派の哲学者の言葉に感銘を受けてる。きっと一
度は耳にしたことはあるだろう。

侮辱とは、相手のせいではない

侮辱と考える、自分のせいである

容赦はいかなる復讐にも勝る

よく言ったものだ。

私は奴隷という自分の置かれた境遇に何度も嘆き、時には恥じて、
ありとあらゆるものを恨みもした。

だからこそ今の自分があるとも十分納得はしている。

しかしどうだろう？ 全てを手にした時に、なにに対して怒りの矛先
を私は向けていたのだろうと…？

己を怒らせているのは、己自身の怒りの心だったと。

もっと早くにこの教えを請うことができていたなら、どれだけ楽になれただろうか。今さら遅いのだがな。

今や私も人の親だ。だから分かるのだ。

カルロも恐らく同じ苦悩を味わうことになるだろう。

その逆行に耐え抜く強靱な“精神”を、カルロ……いや多くのローマの民は必要としていると思うのだ。

そこで成人を向かえるまでのひと時の間、カルロをできれば高名な師の元で学術や戦術を学ばせてやりたいと思う。

貴殿の御意見を伺いたく存ずるしだいである。

『敬意を込めて マー

カントニオ 』

溜まりかねた雨雲が我慢しかねて、フォロ・ロマーノにとうとう大粒の雨をこぼし始めた。ばたばたと屋根を叩きつける雨音がクーリア内に鳴り響いていた。館内は外の世界と違って、ひんやりとした空気が漂っており、通路から奥まった所に位置する部屋で2人の男が対話をしていた。

「……おもしろいね。あのマーカントニオが私にこんな文をよこすなんて」

皮肉っぽい笑みを浮かべ、豪快にはやした自慢の顎ヒゲを上下にさ

すりながら話すこの男は、30歳半ば位であろうか。深紅色の布で覆われた椅子に腰かけ目の前の少年にそう尋ねた。

「はい、確かにそれは私の父、マーカント二オからバルトロ様に渡すように頼まれた手紙であります」

「ってことは、君がマーカント二オの子供の…カルロ君かな。初めまして、私はバルトロだ。マーカント二オとは過去に同じ司令官の元で戦ってきた戦友だ。」

先程と違って、バルトロは屈託のない笑顔でカルロに握手を求めた。一瞬、躊躇しながらカルロはその行為に答えた。

（な…んか…うさん臭い人だな。第一、父上よりかなり年齢も下じやないか。本当に知り合いなのかな…。ここにいる元老院議員達はみんな年寄りが多いっていうのに、このバルトロったらずい分若いし…何ていうのか覇気がないっていうか…）

臆病者に覇気がないと指摘されるバルトロに少し申し訳なくも感じながら、カルロは訝しげな瞳で彼を見つめた。その心中を察したのかどうかは謎だが、バルトロは眼差しを足元に落とし話を続けた。

「マーカント二オと共に戦っていたのは1年と半年位だったかな。私が成人を向かえ初めて出兵した戦でマーカント二オに出会ったんだよ」

懐かしく話す傍ら、哀愁を帯びた横顔にバルトロは嘘をついていないとカルロは思い、疑った自分を恥じた。

「すでに彼には当時の司令官より戦術に対する洞察力が長けていた。だからその後に、軍を率いる長になったと聞いても大して驚きもしなかったさ」

バルトロはカルロの父の武勇伝を、余すところなく披露し始めた。それがカルロにとって気を許してしまったのだろっか、思わず相槌を打ってしまった。

「ふふっ…きつと父上のことだ。その頃にしてライオンでも象でも平気で噛み付いてしまうような、迫力があつたのでしょっね」

「そうそう、あの頃からマーカントニオはローマーの強面で、石にされた神々も恐れをなして逃げた…えっ？」

「…はい？」

「……………」

「……………！！！」

カルロは思わず口が滑り『しまった！！』という顔つきで己の口を覆った。

「カルロ君、きみは…」

「すみません。あの、事の軽重をわきまえない発言…」

全ては後の祭り。静まりかえる室内に輪をかけて高まる緊張…と思いきやバルトロの視線は優しく、柔和な表情でカルロを見ていた。

「本当にそっくりだ。笑ったところなんて見間違えてしまうところだった…いやいや、顔がにやついていたら失敬」

「えっ？」

事態が全く把握できず、丹精に整ったカルロの顔つきが見る間に崩

れていく。バルトロはくすつと笑い、カルロの頭に手をのせてささやいた。

「きみの母上にさ。ローマでも5本の指…いや間違いなく1番美しい人だったと私は断言できる」

思わぬところから思わぬ発言に、面食らったカルロは言葉を失った。また昔から“母親譲りの顔”と周りからはやし立てられるこのような表現が侮辱されてるように思えて幼少の頃から嫌いだった。

だがマーカントニオは真剣だった。真剣な顔つきで話しを続けた。

「教養も有りマーカントニオにの妻には申し分なかった」

気のせいだろうか。バルトロはカルロの亡き母上を思い懐古するというよりも、まるで昔の恋人を思う1人の男性の面持ちになっていた。

「バルトロ様…？」

カルロの問いかけに我を取り戻し、バルトロはすまぬ、すまぬとカルロの頭を軽くたたいた。すると何かに気づいたバルトロの手が止まった。

「ん…どうした？このこぶは？」

「…こ、これは……」

通り魔に殴られた所が熱を帯びしつかりと膨れ上がっていた。返答に困ったカルロの伏せた視線の先にはありありと路地裏の悲劇と、“笑う悪魔”の顔が浮かび上がってきた。

（思い出してきたら…むかつ腹が立ってきたぞ。でも結局あの子にお礼言っただけだったや。見た目と反して不気味な面もあったけど…

助けてくれたんだよね…あれでも)

二度と会うことのないであろう少年の顔が次第にぼんやりと薄れていく中、せめて忘れる前にと心の中でカル口は少年に礼を述べた。

第5章 手紙2

いつの間にかバルトロは使用人を部屋に呼びいれ、腫れ上がったこぶを冷やす為の濡れ布巾を用意させていた。

「すっかり冷やしておいで。マーカントニオがそんな姿を見たら大変なことになる」

「大変なこと？」

食い入るようにカルロの瞳がバルトロを捕らえていた。いつの間にかこの男の洒落の聞いた言葉がなぜか気に入り、生きてきた13年間でこんなに大人に興味を抱いたのは初めてではないかとカルロは思った。

「そうだな、間違いなくマーカントニオのやつが怒り狂うだろう」

バルトロははつきりとそう断言したが、カルロは頭を左右に振りこれを訂正した。

「そんな大袈裟な。父上が僕を傷付けた犯人に対してお怒りになるとても？」

困った表情を浮かべるカルロに、バルトロはぱちりとウインクをした。

「違う違う！ この軟弱者がつてね。それでも俺の息子かと、このローマーの石頭を持つ俺の息子なのかて——ってね」

そう言うことかと理解したカルロはすぐさま負けずに言葉を返し

た。

「あはは、それは確かにお怒りになるに違いない。そして軟弱な僕に嘆き悲しんだ父上から、僕はお叱りの一発を浴びるんだ。ってことは頭にもう一つのこぶが出来ると言っ訳ですね」

カルロはこうして導き出した答えをバルトロに披露し、彼を見つめた。

「正解、理髪な子だ」

「誉めているんですか？ちっともうれしくないですよ」

2人は笑い合いこの他愛の無い会話をしばらく楽しんだ。またバルトロは元老院議員ではなく帝国各地を視察しその報告がてらにフオロ・ロマーノに帰還してきた、現役の軍人だと知った。

（すごいな、バルトロ様。僕が見たことのない砂に囲まれた大国や、どこまでも続く深碧の海原を見たことあるんだろうな……）

このバルトロにカルロは尊敬の意を抱きつつも羨ましくも思い、他国の情景を浮かべては話しに聞き惚れるのだった。

気がつけば窓辺から柔らかい光りがすうつと差し込み、いつの間にか外の雨が終わりを告げていた。カルロはこれを機にバルトロとの別れを惜しみつつも帰り支度を始めた。

「雨も上がったようなので僕は帰ります。その手紙に関してはバル

トロ様がフォロを発つ前に、お返事を頂きたいとマーカントニオは申しておりました」

名残惜しさを物語る透き通った灰色の両のまなこ。

「またいつかお会いできる日まで」

カルロの別れの挨拶に、頷き落ち着き払った響く低い声。

「ああ、マーカントニオによろしく」

バルトロに見送られカルロは部屋をあとにしようとしたその時だった。バルトロの口から不可解な言葉が発せられた。

「ゲームは得意かい？　なかなか面白いゲームがあつてさ、サイコロを振って駒を進めてゴールを目差していくんだよ」

「タブラの事？　確かギリシャのセネトっていう遊びがローマに入つて変化した遊びだと聞いたけど」

バルトロはニヤッと含み笑いをすると人差し指を立てて左右に振った。

「おしいが元はエジプトだ。気の長くなる位の大昔——古代エジプトの王朝時代が始まりさ。これをギリシャの商人が本国に伝えて、形を変えつつ今のタブラが我々の娯楽としてローマに広がった」

「へえ……雑学王ですね」

「なんだいそれは、その馬鹿っぽい響き」

お気に召さなかったのか、それともほしい言葉を貰えなかったのかバルトロは膨れっ面し嘆いていた。

だがこのひと時に垣間見た、少年のようなバルトロの表情が人間臭くそして身近な存在に感じたカルロは目を細めて言った。

「馬鹿にしてませんよ。当たり前前の知識を誇示している、そうだな僕の修辞学校の先生とは大違いです」

カルロは誤解を解くために、またバルトロにいらぬ不快感を抱かせてしまったことに罪悪感を感じ慌てて訂正をした。

「はは、怒ってはいないさ。ただ知識の引き出しは多いほうがいい、いざっていう時に役に立つこともあるんだ。第一その人にとって何が得して無駄になるか今の時点では誰も分からないしね」

バルトロはそう言うのとカルロの前に一歩近づき、カルロの華奢な肩に手を置きこう呟いた。

「どうだい、私の元でしばらくサイコロでも振ってこの“ローマの国”という盤上で遊んでみないか？ カルロ君」

事実上、これが手紙の返事にあたるものだった——とカルロは後々気づくことになるが、今は知るよしもなかった。

第5章 手紙2（後書き）

小説の基本を学びながら本作品を進めていっていますが、まだまだ間違いだらけで、自分の知識と技量の低さに嘆いております。なにか発見！？されたらバシバシと指摘願います。

それとよーやく次回から話しがコロコロと展開していく様子なので、お時間がある方はご覧になって下さいね。

第6章 夜明け

朝を知らせる陽の光りが街を漂う朝もやに反射して、ローマの街は銀で彩られた粉が舞うような、なんとも目映い光りに包まれていた。

またローマと言えば“日の沈まない国”として知られる通り、手にした東西南北の領土が余りにも広大だった為に、どこかしらの国では必ずしも頭上に太陽が昇っていた。それは不滅のローマ帝国の夜の帳がおきるまでの間、そうこれから何百年と続くであろう巨大化したローマを称えた言葉でもあった。

夜が明けたのを告げる暁の女神アウローラが、カルロの元へとそっと降り立ったのはそれからして間もないことだった。

カルロの閉じた両の瞼には、うつすらと差し込むアウローラの微笑みが淡い光りとなり、カルロをくすぐり、目を覚まさせた。何か悪い夢でも見たのであるうか、カルロは寝汗でぐしよりと全身を濡らしており、たまらなくなっ使用人の奴隷を呼んだ。

「どうしました、カルロ様？」

慌てて部屋に駆けつけてきたのは、カルロより幼い奴隷の少年だった。この少年の両親は、マーカント二才が農奴という役務の為に連れきた奴隷達であり、彼らは主人と衣食住を共にして生活した。この少年を含む多くの奴隷の子供達は、この土地で産声をあげこゝで一生を送る、外の世界をひと目見ることさへ滅多になかった。

「わあ！ びつしよりでないですか、悪夢でも見たんですか？」

扉を開けたその少年の眼に飛びこんできたものは、寝汗がまとわりついた衣を脱いでいるカルロの姿だった。

「悪夢なんて見たかな。覚えていないんだ……すぐ着替えをもってきてくれるかい？」

カルロはようやく、濡れて脱ぎにくくなった寝衣を体から剥ぎ取り、大きなため息をついた。すぐさま少年はカルロのそばに走りやり状態を把握すると、部屋から飛び出し右隣の小部屋に置かれている青銅家具の中から、着替えを取り出しカルロの元へと運んだ。

「これをどうぞ」

「ありがとうグリエルモ。助かったよ、ってこれは？」

カルロの手に渡った衣と思われたそのものは、よく見ると衣ではなかった。

「あれれ？」

覗きこむグリエルモの表情が見る間に変化していった。

「わあ、ごめんなさい、間違えて持ってきてしまいました！」

「だろうね。だってこれは……おしめだもの。まあ、よりによってこれを選び出してくるなんてね。バルトロ様が聞いたら笑い転げて喜ぶよ、あの人が好きそうな冗談だもの」

グリエルモは急ぐあまりに、昔カルロが使っていたおしめを衣服

と勘違いし、よく確かめもせずに持ってきたのだった。

「なにも慌てなくてよかったんだよ。昔からグリエルモはそうだ、気ばかりが急いて物事を理解していない」

カルロはグリエルモの前に立つと腰を下ろし、同じ目線に立って、決して叱咤することなくやんわりとグリエルモの間違いを諭した。

「本当に、ごめんなさい……」

グリエルモの小さな唇の端から漏れるようにこぼれ落ちていった言葉は、短いながらも羞恥心と謝意を、まこと確かに表しているものだった。カルロはその言葉を聞き入れ頷くと、グリエルモの茶色の巻き毛の髪を、くしゃくしゃと撫でてやった。

カルロにとってこの奴隷の少年グリエルモは特別な存在だった。グリエルモだけが他の奴隷の子供達と違い、いつも笑みを浮かべ、己の立場を疎む姿を一度も見たことがなかった。

「ふふ、グリエルモは太陽に向かって真っ直ぐに伸びる向日葵みたいだな」

カルロの発した言葉が、何か重要な意味をなしているとグリエルモは気が付きはしたが、さつすることまでは出来やしなかった。困った表情を浮かべたグリエルモが、返す言葉を探っているとカルロが急に声をあげた。

「おつと行けない、こんなにゆっくりしている時間は無かったんだ。約束した時間に遅れて行くこのものならば、あの人がこれ見よがしの皮肉の数々を羅列するに決まっている」

「ええっ？　こんな朝早くからどこかに発たれるんですか？」

珍しく慌てるカルロのその姿に、少々びっくりしながらグリエルモは問うたが、すぐに返事は返ってこなかった。

カルロは目線を逸らし暫くしてぽつりと言葉を吐いた。

「うん……ちょっとね。あそこに赴いたらきつと、今まで見たことのないような、そうだなまるで真っ赤な血の海を見ることになるんじゃないかな」

「血の海！？」

聞き捨てるにはあまりにも尋常ではないそのセリフに、グリエルモは驚きカルロのそばに歩み寄った。すると一瞬だがカルロの体が小刻みに震えていたように感じられた。

「あの、大丈夫ですか？カルロ様」

心配そうに覗きこむ両の眼に見つめられて、カルロは鍵のかかっていた重い唇を開きグリエルモだけに本心を語り始めた。

第6章 夜明け（後書き）

久々の更新です。貴重な読者の方々に忘れられないようにできれば、定期的に更新していきたいんですが……。

それにしてもやはり話しが進みません。ダラダラと毎回長くてごめんなさいです。感想お待ちしております。

第7章 日出

「ごめん、グリエルモはただ聞くだけでいいから……」

こんなにも幼く、読み書きさへろくにままならない、グリエルモに伝えても果たして理解できるだろうか？ それ以上に話したことで状況は決して変わるはずではないのだ。

それはカルロ自身も十分に納得していたが、喉に詰まっていたそれは限界に達して、瞬く間に口からあふれ、声になり、言葉を紡ぎ、不安げな瞳でカルロを覗きこむグリエルモの両の耳に流れ込んだ。

「今、ローマが少しおかしいことになっているんだよ。それとも変に感じてしまう僕の方に欠陥があるのかな」

「欠陥？」

カルロは明らかに無理矢理とも思える薄い笑みを浮かべ、うつすらと窓から差し込む朝日に視線を移した。

「ほらグリエルモ、あっちには何がある？」

カルロは窓の外を静かに指差した。普段からカルロの寝室がある2階に滅多に上がることのないグリエルモは、この部屋から望む景色がどんなものか検討もつかなかった。そのため眼下に広がる林の先に、突如ひょっこりと巨大な建物が現れたものだから大きく口を開けて啞然とした。

「わあ。なんかとっても大きな建物がありますよ！」

グリエルモはその建物の巨大さに驚嘆し、頬を紅潮させながらカルロに問い返した。

「そудだよ、気づかなかっただろう。あれはね、コロッセオという闘技場だよ。あそこで市民にパンが無料で配られ演劇や戦車競争が催されているんだ」

カルロは急に瞼を閉じ黙り込んだ。いや言葉を詰まらせたといったほうが正しかった。

重い空気が漂う中、ようやくカルロは何かを睨みつけるようにして瞼を開けた。

「彼らがつとも興奮し熱狂するものが、猛獣や奴隷同士がどちらかの命が尽きるまで戦う見世物さ。こんな催しごとがひっきりなしで行われている場所がコロッセオなんだよ」

大まかに大胆にコロッセオの概要を説明したカルロは、グリエルモの怯えた反応を想像した、自分と同じようにと、だがグリエルモの反応は大きく的外れていった。

「えっ、タダって……パ、パンがタダで食べられるんですか!？」

思わず拍子抜けしてしまったカルロは、くらくらと軽い目眩を覚えた。

（おいつ、そこにいくのかい。グリエルモ……）

口に出しはしないがカルロは思わず心の中でつつ込んでしまった。

でも奴隷の少年からしてみれば、ただで有り付ける“ご馳走”なんて夢物語があれば、当然こちらにかじりつくだろうと納得できた。

「ああ、そうだよ。今のローマには衣食料や鉱物なんかが大量に流れこんでくるからね。だからローマからしてみれば市民にパンを与えるなんて造作もないことだよ。それで皇帝や貴族は彼らのご機嫌とりができるなら安いもんさ」

「いいな、僕もお腹いっぱいパンを食べたいです。そんな夢見たいなところがあるのなら、死ぬまでに一度でもいいから行ってみたいです」

なんの躊躇もなくそう発言するグリエルモに、カルロはこれ以上話を続けることはできなかった。グリエルモを卑下してるわけでもなく、コロッセオに半ば強引に誘ったバルトロに悪態を付きたいわけでもなかった。

ほとばしる鮮血、飛び散る肉片、円の中で絶命する人や獣。今のローマの民はそれに熱狂し、またそれでしか噴出す欲望を、興奮や歓喜にへと還元することが出来なくなっていたのだった。

みなが狂っているわけではないのだ。逆を辿ればカルロだけがみなと違うことになる。

道理が欠落し、列を乱すものは異端とされた世の中……。カルロはこの娯楽施設への誘いを断るすべが見つからず、諦めるしかないと決意した。

「もういいんだ、グリエルモ。今の全てを忘れてほしい。僕はいつも人とずれている節があるから」

「えっ！？ もういいんですか。まだ何も聞いていませんよ、僕」

カルロは床に脱ぎ捨てた寝衣を拾い上げ“よろしく”とウインクをしグリエルモに渡した。

グリエルモは納得のいかない様子で口を尖らせ、カルロにまとわり付き話しの続きを求めてダダをこね始めた。いったんダダをこね始めるとテコでも動かないグリエルモだったが、それはカルロの身を案じてのものだと、カルロは感じとっていた。

「分かったから、グリエルモ。時間がないんだから話しはまた今度にしよう」

「ダメですよ、僕は引きませんから！ こんなカルロ様をほっとけないです」

なんで子供はこう聞き分けがないのかと、迫ってくる約束の時間も相俟ってカルロはだんだん面倒臭くなり、しかたなしにととうとう観念した。

「降参だ、グリエルモ。君には本当に頭が上がらないよ」

カルロは苦笑いしつつ、両の腕をひらひらと宙に上げ降参の狼煙を上げた。

「さあ、急いでグリエルモも準備をするんだ。もうすぐあの方が迎

えにあがられる時間だ」

「えっ……？」

グリエルモは事態がよく飲み込めずに難しい顔つきになっていた。

「だから心配なんだろう？ 僕のこと。一緒に付いてきたらどうだい？」

いつの間にか寝室は窓からもれる太陽の光りで、暖色系の壁がよりいっそうに色鮮やかに浮きだっていた。それは太陽が徐々に空のてっぺんに向かって昇る一日の始まりを示すものであった。

太陽が昇り、朝に別れを告げ、昼に向かい、夜を迎える。毎日がかさず太陽が時を刻む、目を瞑っていたらなんともない変わらぬ毎日の繰り返しだ。とカルロはそうと信じていた、少なくとも今までには。

想像もしなかった、今日が彼ら2人が一緒に過ごす最後の朝となることは、誰が予想できただろう？

残酷にも運命の歯車が軋む音をたて、この瞬間に静かに回り始めたのだった……。

第7章 日出（後書き）

久方ぶりの更新で皆様に忘れ去られていないか、多少心配しております。気長に付き合っていて頂けたらうれしいです。

第8章 正午の再会

暴君とし名高いかつてのローマ皇帝、ネロの離宮があつた場所に巨大な闘技場“コロッセオ”は建てられていた。

「わあゝすごい、すごいですよ、カルロ様！ あっちにもこっちにも人、人、人――だらけですよ！」

「ちよつと待った、グリエルモ。はしやぎすぎだよ、ってどこに行くんだよ！ 走らないって約束しただろう。迷子になっても僕は知らないよ」

コロッセオにお目当ての剣闘士達の戦いを見に訪れた大観衆で、少年達は揉みくちやにされながら必死に人垣をかきつつ、ドーリア式やイオニア式と呼ばれる、各階にそれぞれ異なった仕様が施されたアーチの下をくぐり抜け突き進んでいった。

「おゝい、君たち。仲むつまじいのは結構だけど、2人とも私の存在を忘れていないかい？」

カルロ達の後ろから投げ放たれた低く響く声の持ち主が、嘆き悲歎めいた声を上げていたため、カルロは思わず我に返りその男の方を振り向いた。

「申し訳ありません、バルトロ様……って何ですか、その顔は？」

カルロの瞳に映ったバルトロの表情は口元が緩み薄ら笑いを浮かべていた。明らかにこの状況をおもしろがっている様子がカルロには手にとるように分かった。

「もう、ふざけていないで早く行きますよ。グリエルモが1人で先に行ってしまったんですから」

カルロはバルトロに半ば八つ当たりと言わんばかりの、怒声を吐き捨てた。

今朝からカルロは少し苛立っていた。正午に開催される剣闘士たちの試合のようすを想像したり、苦手とする人混みに嫌気がさしていたからでる。バルトロから背を向けるとすぐさま、グリエルモを追いかけ始めた。

「ふう、やれやれだ、。追いかけてこするような年ではないんだけどな、私は」

愉快がってカルロの背中を見つめるバルトロの眼差しが、いつの間にか波風たため水面のような静けさへと、さま変わりをしていた。

「おやおや、今日は暑くなりそうだ」

バルトロが見上げた先には雲ひとつない青空が広がり、気がつけば太陽がこの日のうちでもっとも高い位置に昇ろうとしていた。

「本当にどこに行ってしまったんだ。グリエルモは……奴隷の子供がこんな所ではぐれるなんて自殺行為だ」

忽然と姿を消したグリエルモ。カルロ自身もまさかこんな所で見失うなどと思ってもせず、感情が高まり声が微かに震えていた。

「グリエルモのやつ、僕を心配してついでに、逆に僕に心配かけるなんて……」

階上の余りの人の多さに、左右の方向感覚さへも分からなくなり、カルロはどうすることも出来なくその場で立ち止まるしかなかった。

「いたいた、カルロ君。そんなに熱くなってどうする？ 君までが迷子になってしまうよ。それにしても驚いた。君は大人しい顔をしているが実は激情家なんだね」

全くことの重大さを理解していないのか、それとも多くの戦で生死に係わる修羅場をくぐり抜けてきたためだろうか、バルトロは慌てる様子もみじんもなかった。

「だがあんまり、うかうかはしてられないな」

「それはどういことですか？」

思わず虚をつかれたバルトロの一言に、カルロは険しい表情で問い返した。

「見て分かるだろう。ここの階上は2階や3階と違って大理石張りの席が並んでいる来賓席さ。私には地元の政府高官に知り合いがいるから、彼の計らいでこの階での観戦がいとたやすくできたんだ」

「だから……どういう意味ですか!？」

バルトロの遠回しの言い方に業を煮やし、続けざまにカルロが追求しようとしたその時だった。

「なんだ、貴様は！」

決して遠くはないだろう、数メートル先の人垣の向こうから荒々しい声が発せられたのが、しっかりとカルロの耳にも聞こえた。

変な胸騒ぎをカルロは覚えた。先程まで熱を帯びてた体は一気に血の気が引き、冷たくなって心臓の鼓動だけが早鐘のように全身で鳴り響いていた。

「まずいな」

そんなことをバルトロに言われなくともカルロも十分に分かっていたが、口はカラカラと渴きを訴え、なにも声にならなかった。

「予想が的中してなければいいんだが」

バルトロはすぐさまに、カルロの腕を掴むとその声がする方向に駆け出した。

カルロは走っているには違いなかったが、回りの景色はまるで歪なコマ送りの演劇のような、現実に捕らえることのできない浮遊感の中を漂っていた。

そしてようやく、人並みの切れ目を見つけその隙間に体を滑り込ませたカルロたちの前には、想像を遙かに超えた現実が憚っていた。

「ちつ、よりによって今日は彼が帰還していたなんて……」

バルトロは苦々しく言葉を噛み砕いた。

カルロたちの目線の先には、金糸や銀糸の刺繍が施された緋色したトガ・ガピクタと言われる凱旋將軍だけが着ることが許された、衣服を身に着けたがたいのいい男が立っていた。

その男の脇では槍を手にした幾人かの衛兵たちが、地面に転がる小さな人影に矛先を突き立てようとしていた。

「グリエルモ……」

バルトロが瞬時にカルロの豹変する気配を察知し、口をふさごうとしたがほんの僅かに間に合わず、階上一面にカルロの声が甲高く響きわたった。

バルトロが、將軍と思しき男が、衛兵が、ローマ市民の何千ともいや何万ともいえる視線がカルロに注がれた——がその中にひと際目だって、美しく碧く見覚えのある二つの瞳が、カルロを静かに見つめていることに気がついた。

その者は女性がおもに着用するくるぶしまで届くようなストラをまとい、それがよりいっそう神秘的な雰囲気を漂わせていた。

（なんで君がここにいるんだよ……）

將軍と思しき男の傍らには、あの路地裏で出会った美しい顔を
した少年が佇んでいた。

（本当に悪魔だったのかい？ 君は……）

少年は顔色ひとつ変えることなく、また路地裏で出会った時と同
じく、とても冷たい眼差しでカルロを見つめていた。

第8章 正午の再会（後書き）

ようやく主力選手が全員出揃いました。ここまで辿り着くまでかなりつらく？長い道のりでした。

あと私事ですがHPを開設しました。これから少しずつコンテンツを増やしていく予定です。作者紹介ページから転送されますので、お暇があれば遊びに来てくださいね。

第9章 皇帝と少年（前書き）

今回出てくるヌマンティーヌスのおっさんは実在しない皇帝ですの
で。

遠からず近からずといった皇帝様はいたんですが、悩んだ末に架空
の人物という設定になりました。

第9章 皇帝と少年

無機質な二つの碧い瞳が時おり陽光を浴び、まるでラピスラズリのような妖しくも美しい輝きを放っていた。

ラピスラズリといえば“星のきらめく天空の破片”と今は亡きあのローマの学者がそう称えたように、少年の碧の瞳は瑠璃の宝石を彷彿とさせるものであった。

カルロはその瞳を間のあたりにした瞬間、風化してこそげ取られた壁画が鮮やかな装飾画へと息を吹き返したように、あの路地裏での記憶が鮮やかに蘇ったのだ。

（ああ、そうだ忘れもしない。その美しい碧の瞳は……路地裏の悪魔だ）

あの路地裏の薄明かりの下でも十分にも、淡く美しかった碧の瞳は太陽と鼓動しあい、より一段と輝きを増していた。

それと同時にカルロはあの悪魔の言葉を思い出した。

”悪魔の気まぐれ…か”

“私の魂の端っこには、もう捨てて無くなってしまったと思い込んでたほんの僅かな…人の心が残っていたのか”

カルロはこの美しい少年に拭えない疑心を抱きつつも、あの暴漢者から命を救ってくれた少年の代えがたい恩赦の事実も決して忘れてはいなかった。恐らく、謎めくなどという単純な言葉で綴れないほどに、複雑ななにかがこの少年の根底にあるのだ。

カルロが自問自答しているその時だった。

大きな人影がゆらりと二人の少年の間に割り入り、不適な笑みを浮かべてこういった。

「おやおや誰かと思えばバルトロではないか」

緋色の衣をまとったこの男は、バルトロを舐めるような目つきで見下ろしていた。

「お久しぶりです、今日こちらに戻られているとは私め存じておらず、ご挨拶が遅れ何卒申し訳ありません」

バルトロはすかさず一歩前に歩み出ると、その男の前で片膝を着き深く頭を下げ謝辞を述べた。

「ご無礼をお許しください。ヌマンティーヌ様」

バルトロが発したその男の名を聞きカルロは自分の耳を疑った。

（バルトロ様は今あの男の名をなんていったんだ、僕の聞き間違いではなければ……）

額の汗が静かに頬をつたい滴となって地面に滴り落ちた。

（ローマ軍団最高司令官の名が、そう又マンティーヌス皇帝だ！）

カルロは周りの景色がぐらりと湾曲にねじ曲がり、意識が飛び地面に倒れそうになった。

皇帝と謁見する機会がない幼いカルロは、姿かたち知らぬとも彼の各遠征先での非情狡猾な戦術、はたや粗雑に扱われた属州が退廃の一途を辿ったと、街中に流れる噂だけは耳にしてきたのだった。

冷酷無情と謳われた皇帝が、いま目の前にいる又マンティーヌスその人だった。

「バルトロよ、その後ろについておる少年はお前の連れか？ひどく青ざめた顔をしておるが」

ふいに投げかけられた又マンティーヌスのひと言に、カルロは全身が凍り付き現実から逃避するように俯いてしまった。

「御意にございます。西地区所属の元老院のマーカント二オの子息、カルロと申します」

恐る恐る、顔を僅かに上げるとこちらに目をやるバルトロの視線とぶつかった。

なにかを秘めたバルトロのものいわぬ瞳。

何もお前は返してはならぬと訴えるバルトロの瞳。

カルロは震える拳を固く握り締め、呆然と立ち尽くすだけだった。

「そうか、あの猛将と謳われたマーカントニオの息子か。育ちが顔に出ておる、よい顔つきをしているではないか」

「閣下からそのようなお言葉を頂戴し、マーカントニオもさぞや光栄の至りではないでしょうか」

バルトロの声はいつにもなく固くぎこちないものであり、彼の緊張が否応なしにもカルロにまで伝わった。

「ふむ。ところでひとつ気になるものがあってな、これはなんだろう?」

ヌマンティーヌスの振り落とされた目線の先には、うずくまる小さな影があった。間違いないグリエルモであった。

「この薄汚いネズミは、よもやお前の連れではないであろうな」

「そ、それは……」

バルトロは言葉を詰まらせ、苦痛に顔を歪め唇を噛んだ。

「このネズミが急にアンドレアの前に飛び出してきてな、近衛兵がこ奴を静止しなければ危うくアンドレアが怪我をしてしまうところだったのだ」

「そうでありますか」

バルトロがそう答えたようにカルロもまた同じだった。皇帝の前に彼らはもう頷くことしかできない状態であった。

あたかも寄せては砕け散る岸壁の波のように、白い泡となり消し去ることはできない、そういう現実だけが残った。

「はて、どうしたものか。なあ、アンドレア？」

ヌマンティーヌスが、卑下たあざ笑いを浮かべアンドレアと呼ぶれる少年を見た。

（君はアンドレアという名をしているんだね）

カルロは届くかどうか分からぬ祈りを、全霊をかけアンドレアに投げかけた。

（お願いだアンドレアよ、僕の友を救ってくれ！ 僕の勝手な思い込みかもしれない……でも僕には見えるんだ、君は唯一その皇帝と対等な存在に）

だがそんなカルロの願いはむなしくも、アンドレアには決して届くことはなかった。

「なあ、黙っておらぬで応えぬか。アンドレア」

するとアンドレアと呼ばれた少年は、うつすらと淡い笑みを浮かべ、皇帝を仰ぎ見てこう囁いたのだ。

「酔狂にもほどがありますよ、ヌマンティーヌス様。この私めに判断を委ねますか？」

カルロはぞくりとした何かが首筋を通りすぎてゆくを感じた。

「無理は言わぬ。お前が判断を下せないのであればよいぞ、私がこのネズミに罰を与えるだけだ」

ヌマンティーヌはそういうと、周りの近衛兵に命を下そうと右手を掲げたが、それを制止するかのようにそっとほっそりとした美しい指先が触れた。

「アンドレア？」

「わざわざヌマンティーヌ様のお手を煩わせる必要はありませんよ。それにあなたの直属の兵を使う必要もない」

そう言い放ったアンドレアの視線がヌマンティーヌを離れ、たった一瞬であったが

(えっ……？)

アンドレアがカルロを見つめたのだ。

ほんの僅かな刹那ともいえる一瞬であったためカルロが瞬きをしてる間に、またも碧い瞳はカルロの元からすり抜けていった。

そして次には誰もがはつきりと分かる、太陽の光りが降り注ぐコロッセオの円の中心を仰ぎ見つめ、指差しこつ呟いた。

「あそこに放り込めば済んでしまう話しではありませんか」

カル口は一瞬にして地上の光りを失い、真っ暗な闇に突き落とされてしまった。

第9章 皇帝と少年（後書き）

大幅に更新が遅れておりますがお許しください。

この作品は1話書き上げるのに、想像以上の時間がかかってしまい、それで、こういうわけで、ゴニョゴニョ…。

言い訳はよくないですね。

ムチ打って頑張りますので、応援よろしくお願いします。

第10章 狂ったお遊び

「ほほう、コロッセオの円の中心にこのネズミを放り込めというのか？」

ヌマンティーヌスは聞くまでもない、誰もがその意味を安易に理解できる質問を、わざとのようにアンドレアに投げかけた。

「はい、ヌマンティーヌス様。ご不満でもあられますか？」

アンドレアもまた、透き通った美しい声に意地悪な微笑まで付け加えてその質問に応えた。

「だがなアンドレア、この輩はネズミと言っても子ネズミだ。そんな子ネズミを血気盛る剣闘士たちの戦いに放り込んだとしてもな……」

「だったら、どうとでも？」

アンドレアは臆することなく言い返した。

「結果が見え過ぎておらぬか？」

ヌマンティーヌスのもっともな意見に、絶望の淵に叩き落とされていたカルロは思わず希望の光りを見いだし顔を上げた。

それよりほんの僅かだが先に、アンドレアの声が宙を駆けていった。

「別に剣闘士だけではありませんよ、今日は確か体格もよく毛艶のよい雄のサーベルタイガーが入ってきていると聞きました」

「そうか、そうであつたな。子供と言えども人間と獣となれば、おもしろいかもしれんな。理性が働かぬ戦いほど、純粹で無垢でそしておぞましい……からな」

ヌマンティーヌスはあざ笑い、アンドレアは静かなる瞳を携え談笑を続けた。

美麗な少年と猛々しい將軍。

二人はタブラの盤上で駒を操り遊ぶ無邪気な子供のように、グリエルモの命をもてあそんだ。

そしてカルロは少なからず気がついたのであつた。

何よりもヌマンティーヌスよりも、このアンドレアという少年のほうが生にはびこる暗い闇の存在が大きいということ。

（アンドレアには感情というものが無いのか！？ だから路地裏で彼の瞳を見ても、感情の入っていない人形のような

無機質なものと感じたんだ）

自問自答を繰り返すばかりで、カルロは喘げば喘ぐほどに何も答えは浮かんではきやしなかった。

（どうしたらいいんだ……。このままではグリエルモが無残にも殺されてしまう。僕がこんな場所に連れてきたせい

で、僕の大事な友の命がこんなやつらのお遊びで奪われるなんて絶対いやだ）

カルロは今にも涙が零れ落ちそうになりながら答えを探し求め、行き場のない怒りで自分を責め続けた。

（僕が、そう僕しかグリエルモを助けてやれないのに）

カルロが再びグリエルモを見た時だった。

「グ、グリエルモ……」

静かにカルロを見つめる両の眼があった。紛れもないグリエルモの瞳だった。

泣きじゃくる乳飲み子をあやす母のような柔和な眼差しでグリエルモはただただカルロを見つめていたのだった。

（そ、そんな諦めるといふのかいグリエルモ！）

カルロの小さな胸の中で悲しみはいつの間にか、ふつふつと湧き立つ怒りに変わっていた。

だがその時、無情にも二人を引き裂くかのようにヌマンティーヌの一声が断ち入ったのだった。

「このネズミを牢に連れていけ！」

すべてはこれで終わった。

バルトロも

グリエルモも

ヌマンティーヌも

そしてアンドレアも

そう思った瞬間だった。

「この奴隷の子の主は僕です！」

カルロの響く声に、静まり返る階上

「この子の犯した罪は……そう僕の不行届けによる事故なんです、

責任は全て主人の僕にあるんです！」

凍てついたバルトロとグリエルモの二つの表情。

虚をつかれたヌマンティーヌスの表情。

皆の間をすり抜けるかのように、コロッセオの階上に勢いよく風が走り去りつた。

誰の視線も思わず目に止まってしまつてしまつてであろう、アンドレアの柔らかな金系の髪がふわりと風にあおられ舞つた。

舞つたと思つたが、ほんの僅かな数を数える間に金系の髪がアンドレアの肩に落ち、彼は囁いた。

「おもしろい」

たった一人アンドレアだけが表情を変えることなく、冷えた笑みでカルロを見つめたのだつた。

第10章 狂ったお遊び（後書き）

久しぶりの更新になりました。

作者みずものHP内で現在いろいろやっております、暫く連載ゆつたり週1ペースで更新になるかと。

暫くお付き合い願えたらと思います。HP内にてイラストや設定も少しずつ公開中…。よろしければご意見お待ちしてます。

管理人：みずも

URL：<http://mizumocchi.web.fc2.com/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6639a/>

二つの太陽

2010年10月9日19時00分発行